**〔解　説〕**

　福池桜痴（一説には伊東椿増）が作ったと言われる浄瑠璃に、二世豊澤団平の妻千賀が加筆してできた明治新作浄瑠璃の一つ。団平が作曲し明治十二年十月、大阪大江橋で六世豊竹島太夫が最初に語り、その後、作曲者自身が曲を改めて、明治二十年稲荷彦六座で三世大隅太夫と上演しました。翌二十一年には歌舞伎化もされ、以来、これを上演すれば必ず大入りになるといわれるほどの人気曲となりました。

　盲目の座頭の沢市と、彼に献身的につくす妻、お里の夫婦愛の物語。「三つ違いの兄さんと…」という、お里のくどきは有名。ちなみに奈良の壺阪寺もこの浄瑠璃の評判に伴い、辺鄙な場所にもかかわらず、遠方からの参詣人が集まるようになったといいます。

**〔あらすじ〕**

**〈沢市内の段〉**

座頭の沢市は、洗濯物や賃仕事をして生活を助ける妻のお里と、壺阪寺のほとり、土佐町に細々と暮らしていました。沢市は子どもの頃に疱瘡から盲目となり、そのひがみから、三年の間、毎夜七つ過ぎに家にいたことがないと、お里の行動を疑い続けています。ところがお里は、沢市の目を治したい一念で、その昔、桓武天皇の眼病がここに立願して平癒したことから、眼病には霊験のあるという壺坂の観世音に三年越しの祈願をしていたのです。それを知った沢市は自分も参籠しようと、夫婦そろって寺に向かいます。

**〈壺坂寺の段〉**

夫婦は壺坂寺に辿り着き、沢市は三日間断食をするため、お里を家に帰しますが、一人になると、治る見込みのない祈願をするよりも死んでしまった方が、お里に苦労をかけずにすむと思い、谷底に身を投げてしまいます。再び山へもどったお里は、沢市の姿がないので探すうち、谷底に死骸を見つけ、死後も盲目の沢市の手引きをしてやらねばと思い、夫のあとを追います。そこに観世音があらわれ、妻の貞節と日ごろの信仰心により、二人の命を助け、沢市の目を開けるのでした。

 (一般社団法人　義太夫協会発行)

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

**壺坂寺の段**

辿り行く

伝え聞く壺坂の観世音は五十代、桓武天皇奈良の都にまします時、御眼病甚しくこの壺坂の尊像へ、時の方丈道喜上人の御祈祷にて、たちまち平癒あらせられ、今に至つて西国の、六番の札所とはみな人々の知るところ、げにありがたき霊地なり。折しも坂の下よりも詠歌を、道の栞にて、沢市夫婦やう〳〵と御寺間近く詣で来て

「コレ沢市様。信心は大事なれど、病ひは気からといふからは、お前のやうにしを〳〵と、ふさいでばかりゐやんすと、なほ病ひは重ならう。コレこんな時にはわつさりと、日頃覚えの唄なりと、気晴らしに歌はんしたらどうぢやの」

「ムヽほんにさうぢやの。わが身の云やるとほり、くよ〳〵思ふは目の毒ぢや。そんならあのへと思ふてやつて退けう。しかし、誰も見てゐやせぬかや。エヽままよ。てんぽの皮やつて退けう。エヘンエヘン、憂きが情けか情けが憂きか、チンツンチチンツチツンツ、露と消えゆくテチン、わが身の上はチン〳〵〳〵チリンツテチリツテントンシヤン、アイタヽヽヽヽ、アしもた。今躓いて、あとの合いの手みな忘れてしもた。アハヽヽヽヽ」

「ホヽヽヽヽ」

と唄をしばしの道草に、御本堂へと登り来て

「サア〳〵沢市様。ソレ観音様へ来たはいな」

「ハアモウここが観音様か。ヤレ〳〵ありがたやありがたや。ハア、南無阿弥陀仏〳〵〳〵〳〵」

「コレ〳〵こちの人、今宵こそゆつくりと、御詠歌を夜もすがら、上げませうではあるまいか」

と夫婦して、唱ふる詠歌の声澄みて、いとしん〳〵と殊勝なる

「岩を建て、水をたたへて壺坂の、庭のも浄土なるらん。コレお里。叶はぬこととは思へども、そなたの詞に従ふて、来ごとは来てもなか〳〵に、この目は治りさうなことはないはいなう」

「エヽこの人はいなう。またしても〳〵そんなこと。この壺坂の観音様、昔桓武天皇様、奈良の都にまします時、御眼病にて御悩み、それ故にこの観音様へ御立願なされた時、早速御眼が明いたげな。それ故お前に勧めるもハテモウ天子様ぢやといふたとて、喩え虫けらの様な我々でもあなたに隔てはないはいな。モとかく信心といふものは、気を長う歩みを運んで、心を鎮め一心に、お縋り申せばなに事も叶へてやろとの御慈悲ぢやはいなう。モそんなこと云ふ手間で、はやうお唱へ申しましよ」

と力を付くれば

「いかさまなう。ほんに云やればそのとほり、そんならわしは今宵から、三日の間、ここに断食するほどに、そなたははやううちへんで、なにかの用事仕舞うておぢや。治るとも、治らぬとも、この三日の間が運定め」

「オヽよう云ふて下さんした。そんなら私もうちへ帰り、なにかの用事片付けてすぐに来ませう。ガコレ沢市様。このお山は嶮しい山路、ことに坂を登りて右へ行けば、幾何丈とも知れぬ谷間ぢやほどに、コレ構へてどつこへも」

「オヽどこかへ行かうぞ。今夜から観音様と、首引きぢや。アハヽヽヽ」

「ホヽヽヽヽ」

と笑ひながらに女房が跡に心は置く露の、散りてはかなき別れとも知らでとつかは急ぎ行く。跡に沢市ただ一人、こらへし胸のなくかつぱと伏して泣きゐたる。

「コレ嬉しいぞや女房ども。この年月の介抱その上に、貧苦にせまるも厭ひなく、ただの一度も愛想つかさずあまつさへ、目かいの見えぬこの身をば、大事にかけてたもる志。それとも知らずにいろいろの疑ひだて。コレ堪忍してたも〳〵。今別れてはいつの世に、また逢ふことのあるべきか。不憫の者やいぢらしや」

と大地にどうと身を打伏し前後、不覚に歎きしが、やう〳〵に顔を上げ

「アヽ歎くまい〳〵。三歳が間女房が、信心凝らして願ふても、なんの利益もないものを、いつまで生きても詮ないこの身。世の諺にも云ふとほり、退けば長者が二人の譬へ、わしが死ぬのがそなたへ返礼。生き存へていづれへなりと、よき縁付きをしてたもや。ヤヽ、ムヽ、最前聞へば坂を登りて右へ行けば、幾何丈とも知れぬ谷間とのこと。これの最後所。かかる霊地の土とならば、未来は助かることもあらん。ムヽ幸ひに夜は更けたり。人なきうちに、オヽ、さうぢや〳〵」

と、立上り、乱るゝ心取直し、上る段さへ四つ五つ、はや更けわたる鐘の声

「イザ最後時急がん」

と杖を力に盲目の探り探りてやう〳〵とこなたの、岩にかけ上れば、いと物凄き谷水の、流れの音もどうどうと、響くは弥陀の迎ひぞと、杖を傍へにつき立てゝ

「南無阿弥陀仏」

と、もろともに、がばと飛込む身の果ては哀れなりける次第なり。かかることとも露知らず、息せき道より女房が取つて返すも気はそぞろ、常に馴れにし山道も、滑り落つやら転ぶやら、やう〳〵登る坂の上

「ヤア、コリヤコレこちの人が見えぬはいな。沢市様沢市様、沢市様いなう〳〵」

と尋ね廻れど声だにも、人影さへも見えざれば、あなたへうろ〳〵こなたへ走り

「沢市様いなう〳〵」

とここかしこ木の間を洩るゝ月影に透せばなにか物ありと、立寄り見れば覚えの杖。『ハツ』と驚き遥かなる、谷を見やれば照る月の、光に分つ夫の死骸

「ハアこりやマアどうせう悲しや」

と狂気のごとく身を悶え、飛び降りんにもなく呼べど叫べどその甲斐も、答ふるものは山彦の谺よりほかなかりける。

「エヽこちの人聞こえませぬ〳〵。聞こえませぬはいな。この年月の艱難も、厭はぬ私が辛抱はな、たゞ一筋に観音様へ願込めて、どうぞはやう眼の明きますやう、お助けなされて下されと、祈らぬ間とてもないものを、けふに限つてこのしだら。跡に残つてわたしやまアどうなろぞいな、どうせう〳〵、どうせうぞいな。アヽこれを思へば最前に、歌はしやんしたアノ唄は、どうやら心にかゝつたが、今に思へばその時に、死ぬる覚悟であつたのか。エヽ知らなんだ〳〵。かういふことならなんのマア、お前を無理に連れて来ませう。堪忍して下さんせ〳〵エヽヽ。ほんに思へばこの身ほどはかない者があろかいな。二世と契りしわが夫に永い別れとなることは、神ならぬ身の浅ましや。かかる憂き目は前の世の、報ひか罪かエヽ情けなや。この世も見えぬ盲目の闇より、闇の死出の旅。誰が手引きをしてくれう迷はしやるのを見るやうで、いとしいはいの」

と、かき口説き、口説きたて〳〵歎く涙は、壺坂の谷間の水や増るらん。やう〳〵涙の顔を上げ

「アヽ悔やむまい歎くまい。みななに事も前の世の、定りごとと諦めて、夫とともに死出の旅。急ぐは形見のこの杖を、渡すはこの世を去りてゆく、行先導き給へや南無阿弥陀仏」

弥陀仏の、声もろともに谷間へ、落ちてはかなき身の最後、貞女のほどこそ哀れなり。頃は如月、や、はや明け近き雲間よりさつと輝く光明につれて、聞ゆる音楽の音も妙なるその中に、いとも気高き上藹の姿を仮に観世音。微妙の御声うるはしく

「いかに沢市承れ。汝前世の業により盲目となつたり。しかも両人ながら、今日に迫る命なれども、妻の貞心または、日頃念ずる功徳にて、寿命を延ばし与ふべし。この上はいよ〳〵信心して、三十三所を順礼なし、仏恩報謝なし奉れ。コリヤお里〳〵沢市〳〵」

と宣ふ御声もろともに、かき消すごとく失せ給へばはやの鐘の声四方に響きて明け行く空、ほのぼの暗き谷間には、夢とも分かぬ二人とも、むつくと起きて

「ヤこなたは沢市つあん。アヽ、コレこちの人。お前の眼が明いてあるがな」

「エヽ、アノ、ほんにコリヤ眼が明いてある。オヽ、眼が明いた。眼が明いた〳〵〳〵〳〵。眼が明いた。チエヽ観音様のお陰。ありがとうござります。ありがとうござります〳〵〳〵。ムヽ、そしてアノ、お前はマアどなたぢやへ」

「どなたとはなんぞいの。コレ私はお前の女房ぢやはいな」

「エヽ、アノお前がわしの女房かへ。コレハシタリ初めてお目にかかります。アヽ嬉しや〳〵。それにつけても不思議なこと。正しくわしは谷へ落ち、死んだと思ふてなにも知らぬその中に、観音様がお出でなされ、前世からのこと、こまごまと御知らせ」

「サイナア、私もお前の跡を追ひ、谷へ落ちたに違ひはない。ガ身内に一つも疵つかず、その上お前のお眼は明く、コリヤマア夢ではないかいな」

「ムヽそんなら、今沢市〳〵とおつしやつたが、コリヤ観音様がじき〳〵に、お呼び生け下されましたに違ひはない。ハ、ハ、ハ、アありがたや忝や。これよりすぐにお礼参りは浮木の亀、初めて拝む日の光は、年立返る、心地ぞや」

これぞ誠に観音の、御利生ありけるや見えぬ眼も見え明らかに、ありがたかりける新珠の、年立返るごとくにて、水も漏らさぬ夫婦の命も助かりけるは、誠に目出たう候ひける。けふは嬉しや杖を納めて折しも朝の、日の目を拝んで、お礼申すや神や仏。万見せ給ふはこれひとへに観世音の、これひとえに観音の誓ひの重きは岩を建て水を、たたへて壺坂の庭のも浄土なるらん御示しありがたかりける御法なり。